

# かささぎ 通信 第82号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2019年 6月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年五月の「森三郎の作品を読む会」では  
『森三郎童話選集夜長物語』（一九九六年、刈谷市教育委員会  
所収の「雪」「三條中納言」を読みました。

「雪」（初出『赤い鳥』一九三三年四月号）は六年生の弘とお母さんとのある日の出来事を追いながら、弘の気持ちの動きを描いた作品です。弘のお父さんは昨年亡くなって、お母さんと二人、郊外に引越しましたが、小学校卒業までは、市内の元の学校に省線で通っています。話の展開は次のようになっていきます。

<p>朝 <b>起</b> 傘を持っていった方がよいか どうかで母といさかい。「お母 さんのほか」</p>	<p>からりとした冬ばれの いいお天気 青い深い空</p>
<p>昼 <b>承</b> 弁当の箸が入っていない。「家 へ帰ったら、うんとおこつてや るんだ。」</p>	<p>外はいつの間にか日 かげつて、雨にでもなり そうな空模様</p>
<p>転 <b>転</b> 放課 後、掃 除当番 「家へ帰ったら箸のことをう んとおこつてやるぞ。なんて、 そそっかしやお母さんだろ う。」</p>	<p>低くたれ下った、なまり 色の空 灰のような雪がちらち らふり出す</p>
<p>結 <b>結</b> 駅から 家へ 「お母さんたら・・だめじゃな いか。」「それにさ、迎えにもき てくれないんだもの、こんなに 雪がふるのに。」涙ぐむ母。机 の上には栗まんじゅうが載せ てあった・・。「なべやきう どんでもとってあげようか」と 優しく言う母の言葉に、わけも なく涙がにじみ出てくる。</p>	<p>雪はもうもうとふりし きる ※母が駅前の店に託し ておいた傘のことに気 づかず、弘は吹雪の中へ 飛びこんで、夢中でかけ 出す</p>

弘の気持ち、母親の気持ちそれぞれに感想が盛り上がりました。鈴木哲さんは省線の時刻表を基に大府から刈谷に通う想定を試みています。「三條中納言」（初出『赤い鳥』一九三一年十一月号）の構成も「起承転結」で見えていきます。

**起** 三條中納言というやせつぼちのお公卿さまが何とかして太る方法がないかと、医者の方波重秀に相談すると、医者は古くから言い伝えられているツバナとウナギを食べることを勧める。ウナギが好物になり、中納言は太りに太つてしまふ。そこで、程よくやせる方法を医者に尋ねると、春夏は水漬け、秋冬はお湯漬けのご飯にするよう言われる。

**承** 医者の指示に従ったのにやせないで、その食べ方を見てもらうと、度を越えた量の水漬けを食べる姿にあきれた医者は逃げてしまふ。  
**転** 食べ過ぎたウナギの恨みか、中納言はぎゅうぎゅうと鳴る音におびえ、食が進まなくなる。

**結** 医者は、中納言の頼みでウナギによく効く薬を処方する。それで安心したのか、中納言は薬を飲まないのにウナギの鳴き声から解放される。しかも程よい体型になった。処方薬は実は名薬でも何でもなかった。この話の中の、「太るにはツバナとウナギがよい」という言い伝えが、

『万葉集』巻八と巻十六の同伴家持の歌を指していること、薬のプラセボ効果のことは、「森三郎の作品を読む会」通信第8号で述べました。

三條中納言に水飯を勧めた医者があきれて逃げ帰る部分は『今昔物語集』（巻28の3）、「宇治拾遺物語」（7の3）に原話があると、会員の水野日出夫さんから今回指摘がありました。全く違う古典に話材を求め、明るい滑稽話に仕上げている点が森三郎の特徴と言えそうです。

五月の「読む会」は、ちようど、町のあちこちに茅（ちがや）の白い穂が風に揺れる風景を目にする時期でした。子どもの頃、甘いちがやの若芽（ツバナ）を吸ったこと、かつては年上の子どもからそういう体験が受け継がれてきたことも話題になりました。

次回「森三郎の作品を読む会」 七月十二日（金）午後一時半～三時半  
「けんかの後」「弟」（『森三郎童話選集 夜長物語』所収）